

難訓の歌

万葉集に収録されている市原王の歌は、古来、難訓とされている。原典は漢字で次のように書く。

待时而 落鐘禮能 雨零收

開朝香 山之將黃變

【和文】時待ちて 降れる時雨の雨止みぬ

明けむ朝か山の黄葉たむ

【通説】時節となって降り始めたしぐれの雨が上がった。

あすの朝は、山の木々は黄葉しているだろうか。

万葉集の歌の外形は短歌と長歌が大半を占める。歌の内容による分類も勿論あるが、いずれにせよ歌は漢字で書かれているので、どう読むのが、古今の編者、研究者で探求されて来た。

今日の短歌の定型は五七五七七であるが、万葉の古歌において、おそらくは厳密な定型はなかったであろう。あるのは、和語の音韻ではなからうか。されば前掲の短歌の下の句は、開朝香山 之將黄變 とすれば、和語の音韻に叶うと、筆者は勝手に考えてみた。

そうすると、歌の意味するところが、時代背景を帯びてくる。それが真実

であるかどうかは筆者には分からないが、文字の間から作者の思いが湧き上がってくる。もとより、真実をこの世におわさぬ王にお聞きすることは出来ないが、筆者が歌を通じて感得する過去の様相は語ることができると云うのが、筆者の霊言（霊的存在が語る言葉）と云うのが、全ての霊言は立証できない。あたかも複素空間での解を実空間で求めようとする如くである。従って、感得できる過去の様相は現実世界に生きる人の知覚を通して知れたものに過ぎないのである。その知覚が優れたものであれば、歌は現在に蘇る。筆者の場合も諸兄のご笑覧を信じ、この難訓の万葉歌を読み替えてみたい。「通説」の内容は、景観に対する詠嘆でしかない。しかし、それでは意味をなさないのである。筆者の拙訳は、

【現代歌】時を待ち 落鐘 敬ひ 止む時雨

朝香の山は 將に紅葉ぞ

【解説】政変の時を待ち、古来の銅鐸で警鐘を鳴らすごとき、恵美押勝の乱は起ったが、その天皇家は危機の時雨が収まり、朝には都の山々が紅葉に変るように、新しい御世が来たのだ。

女帝、孝謙天皇（七一八〜七七〇）は東大寺大仏を開眼させたが、後には道鏡を寵愛して、藤原仲麻呂による「恵美押勝の乱」というクーデター鎮圧事件を招いた。朝香の山とは、東大寺建立を遂げた奈良の都を指している。因みに、銅鐸は風鈴の様な鐘であったことが、近年の考古学で判明

した。また、飛鳥も明日香も同じく、皇宮があった都を意味している。同じく女帝の元明天皇の歌に、

飛ぶ鳥の 明日香の里を 置きて去なば
君があたりは 見えずかもあらむ とある。

神武天皇から初まる歴代天皇は、今上天皇（徳仁）まで一二代あるが、全て男系天皇とされている。その中で女性天皇は八人、十代である。重祚（複数回即位）が二人おられ、推古天皇、皇極・斉明天皇、持統天皇、元明天皇、元正天皇、孝謙・称徳天皇、明正天皇、後桜町天皇の八人である。

前出の市原王は藤原仲麻呂と同じ時を生きた王であるが、歴史研究者の間では「恵美押勝の乱」に加担して肅正されたとの説もある。筆者の通説では、むしろ仲麻呂派と女帝派の板挟みから解放された歌と読める。

難訓の歌はこの一首だけではないが、万葉集の歌は漢字の羅列であるので、それをどう読むか、即ち、どう当時の和語に対応させるかが難しいのである。同じ漢字であっても異なる訓読みがあり得る。語彙の区切りにも差異が生じる。万葉集は写本で現在に残っているものである。従って、何系統もの写本を付き合わせて、どちらがより真正であると思われるか、約四千五百首もの長歌、短歌、その他の歌をそれぞれ比定する、パズルのような面白さがあるらしい。

令和四年八月十九日

大中臣正比呂

